

精読とフィールドワーク

教室内外を往還する英語学習の実践

寺西 雅之

1. はじめに

近年、英語教育をめぐるのは、コミュニケーション重視、ICT 活用、AI 利用など、多様な言説が展開されている。特に、生成 AI や機械翻訳の急速な発展により、語学学習の効率が向上する一方、言語表現の細部をどのように読み取り、意味を構築する力を育成するかが改めて課題となっている。また、コロナ禍を経て、身体性を伴う学びや、実社会に根ざしたオーセンティックなテキストに触れる機会の減少も指摘される。さらに、英語学習の目的や意義そのものが問い直される現在、学習者がテキストを主体的に解釈し、多様な意味の可能性を探究する学びの重要性はますます高まっている。本発表では、こうした問題意識を背景に、教室内における文学テキストの精読と、教室外におけるフィールドワークを接続した英語学習の実践を報告した。特に、本シンポジウムで共有された「教室内外を往還する学び」という視点に着目し、精読を単なる読解技術ではなく、実社会と接続する学びとして再構成する可能性を検討した。

2. 教室内における精読実践

教室内の実践としては、文学テキストを用いた精読活動について報告した。これは、発表者が勤務校にて 2025 年度前期に実施した「英語文体論」という専門科目の一環である。教材として用いた *Summer at Cinnamon Beach* では、語りや視点、内面描写に注目しながら読解を行った。特に、自由間接話法の分析を通して、「誰の視点で語られているのか」「どのように意味が構築されているのか」を考察する活動を行った。

例えば、次の引用では、登場人物 Sophie の内面が、語り手による叙述と融合する形で表現されている。

Her stomach fluttered. This was a bit more formal than running into each other on a stretch of sand. Was he asking her out on a date? Like, would he come and pick her up in a car? And would she have to tell her mom? Sophie cringed, thinking about how overprotective she might be. She'd want to meet Dante and ask him a million questions. Then again, her mom wouldn't be home for another few hours. Aunt Parisa had already left the house. She would leave a note. She might even be able to make it to the Aquarium and back without anyone noticing she was gone. (Kamata, 2025, p. 44)

この引用では、Sophie は三人称の形で言及され、また時制も一貫して過去形が使われている。一見すると語り手による描写のように見えるが、Sophie の推測や感情の揺れを読み取るには、彼女の視点の反映である助動詞や疑問文の用法を手がかりとして、語りを解釈する必要がある。このような自由間接話法は、高校までの英語教育ではほぼ扱われないため、文学作品というオーセンティックなテキストを通して、学習者は単なる内容理解にとどまらず、語り方そのものへ意識を向けることが求められるのである。同時に、学習者が語りや視点に注目しながら意味を構築できるよう支援する教師の役割は重要となる。

次の引用も、登場人物 Sophie の内面が描出される自由間接話法として読むことのできる箇所であるが、読者が場面をどのように構築するかによって、別の解釈も可能な興味深い事例である。

When the last of the vegetables had been skewered, Sophie washed her hands and took off the apron. Dinner was casual. They loaded up paper plates and sat at the table outside. There was just enough breeze to keep the flies away. Chester (the dog) lay at her feet, eyeing her hopefully every now and again. She would slip him something at the end of the meal. (Kamata, 2025, p. 28)

この引用でも、Sophie は三人称で言及され、時制も一貫して過去形が用いられている。そのため、この箇所には語り手の語りや登場人物の意識が接近する自由間接話法的な特徴を認めることができる。特に、最後の文 “She would slip him something at the end of the meal.” は、Sophie が食事の終わりに Chester に何か食べ物を与えようと考えていることを示す内的思考の表現として解釈できる。

しかしながら、この箇所には別の読みの可能性も存在する。直前では Chester が “eyeing her hopefully” と描写されており、犬が食べ物を期待して Sophie を見つめている状況が示されている。そのため、最後の文は Sophie 自身の思考であると同時に、Chester の期待を Sophie が読み取り、その認識が語りの中に反映された表現として読むことも可能である。もちろん、作品全体の文脈を考慮すれば、Sophie の視点が支配的であることは疑いない。しかし、この箇所は視点の帰属を一義的に決定することが難しく、読者に複数の解釈可能性を提示する点で興味深い。こうした事例は、文学作品の精読において、文法や語彙の理解を超えて、語りや視点の関係そのものを考察しながら、複数の解釈可能性の中で意味を構築する契機となる。

また、本作品では、多文化的背景をもつ登場人物たちの経験やアイデンティティの問題も描かれている。学習

者は語りや視点を分析することを通して、登場人物の立場や価値観への理解を深めることができる。このような精読は、単に作品内容を理解するための活動ではなく、他者の視点や価値観を想像しながら意味を構築する営みでもある。その意味で、文学作品の精読は、後述するフィールドワークにおける異文化理解や社会的文脈の解釈とも連続する学習経験として位置づけることができる。

実際に、授業後のアンケートでは、「物語として面白い」「表現の細部に注目するようになった」といった反応が見られた。これは、「物語性」と「文体」のバランスの重要性を指摘した学習者の反応と捉えられ、同時に文学作品を用いた精読が、学習者の解釈的読解を促進する可能性が示唆された。

3. 教室外におけるフィールドワーク

一方、教室外では、観光地や公共空間に存在する英語テキストを対象としたフィールドワークに基づく学生の研究例を紹介した。専門ゼミや卒業研究では、学生が実際に観光地を訪れ、英語版・日本語版パンフレットや案内表示を収集・分析する演習を行っているが、本発表では、研究例として「観光地における外国人への配慮と歴史叙述のあり方」を紹介した。当該学生が韓国・景福宮を訪れ、収集したパンフレットでは、日本語版に比べて英語版の方が歴史的背景や出来事の経緯が詳しく説明されていることが確認されている。以下その英語の一部とそれに対応する日本語を示す。

The palace was destroyed by fire in 1592 when a huge Japanese army under the command of Toyotomi Hideyoshi invaded Korea, and lay in ruins for about 270 years until 1867 when a restoration project was launched by Heungseon Daewongun (1820–1898), then head of the government. About 500 buildings were restored or newly built as a result of this project, including the Inner and Outer Palace offices in which the king and his government officials performed their duties, and the residences and other related buildings used by the king, queen and court ladies, and the royal gardens.

宣祖 25 年（1592）、文禄の役の際に全焼してしまい、270 年余間復旧されずに放置されていたが、高宗 4 年（1867）に興宣大院君の主導により建て直された。当時の景福宮では、王と官僚たちが業務を行った外殿と関内各司（宮殿内の官庁）、王や王妃、宮人たちの生活空間となった建物、憩いのための庭園など、約 500 棟の建物が造成された。

特に、英語版では“Toyotomi Hideyoshi”や“Japanese army”のように出来事の主体が明示されている点が特徴的である。こうした比較分析を通して、学生は単なる翻訳の違いではなく、言語表現の選択が歴史認識や読者へのメッセージ形成にどのように関わるのかについて考察を深めていた。このような教室外の真正性を持つテキストの分析は、異文化理解や批判的読解力の育成につながるだけでなく、言語表現と社会的・文化的文脈との関係を主体的に考察する学びを促すものと考えられる。

4. おわりに

本発表では、教室内における文学テキストの精読と、教室外におけるフィールドワークを往還する英語学習の実践を報告した。そこから見えてきたのは、学習者の関心や経験に応じた多様な入口の必要性であり、また、そのような学びを支えるためには、教師による適切な scaffolding が重要であるという点である。

近年、AI や機械翻訳の急速な発展によって、「英語を学ぶ意味」そのものが改めて問い直されている。しかし、だからこそ重要になるのは、教室でしかできない学びと、教室外だからこそ生まれる経験や気づきを、いかに継続していくかという視点ではないだろうか。精読もまた、単なる読解技術としてではなく、実社会や文化的文脈と結びつきながら、学習者自身が意味を構築していく営みとして再定義される可能性をもっている。

同時に、そのような学びを支える教師の役割についても、改めて問い直していく必要がある。本発表で示した実践が、英語教育についての既存の前提を一度立ち止まって見直し、学習者と教師双方にとっての新たな可能性を考える契機となれば幸いである。

引用文献

Kamata, Suzanne. (2025). *Summer at Cinnamon Beach*. Tokyo: Asahi Press.